

Kuroki & Ando eds., *The Foundations of Political Economy and Social Reform* の紹介と短評(1)

——政治経済学、構造改革、公共圏——

上野大樹 (一橋大学)

序：政治経済学と公共圏——公共性の思想史シリーズで本書をとりあげる意図

・ J. ハーバーマス以来、思想史と社会史とを接合した啓蒙研究が大きく発展をとげ、「長い18世紀」におけるカフェやサロンを中心とした文芸的公共圏の展開と、そこで涵養されてきた公論(世論)がもたらした政治的な帰結に、注目があつまるようになった。あまり認知されていないが、ハーバーマスはSWÖ第3章「公共性の政治的機能」や第4章「市民的公共性」で公共圏の大陸的バリエーションをあつかうなかで、百科全書派にもましてエコノミスト、つまりフィジオクラートに「公論」概念発展の功績を帰している。フィジオクラートの政治経済学は、啓蒙期に成長してくるとされてきた公共圏の特質を考えるうえで、ひとつの試金石となる。

・ 本論集は、タイトルが端的にしめしているように、近代的な政治経済(学)がこうした時期のフランスにおける知的潮流のなかでいかに形成されてきたか、また、そうした新たな知と(ときに半ばユートピア的な)社会構想が、実際の政治・社会の現実とどのように相互に影響をおよぼしあいながら社会変動へと帰結していったかを詳細に跡づけるものである。特に刮目すべきは、本書が伝統的な経済学説史的・理論史のアプローチとは一線を画し、むしろ当時の政治経済学という知(savoir)が、狭義の政治組織にはとどまらない政治的なものとしての権力(pouvoir)とどのような関係を取り結んでいたのかをより歴史的に——ときには「考古学」的に——解明していくという姿勢をとっているという点である。純理論的な関心からは、偏りをもった政治的利害関心から独立した客観的な科学(science)としての経済学の確立を、学説史の目的(ends)にして終着点(end)として設定することが暗黙の前提となる。そして、その発展の途中経過として、18世紀の政治経済学を位置づけるという見方は容易には避けがたいであろう。これとは対照的に、普遍的なモデルとしてのポテンシャルをもった生成期の経済学を、同時に、同時代の社会的現実やエピステーメ(学際的性格をもった知の全体的付置)とも相関的に描き出すという作業が、本書の主眼にあるとあってよいだろう。これは、近世ヨーロッパの宮廷顧問官やポリス総監らによって多分に実践的な場面で彫琢されてきた「統治の技芸」や「立法者の科学」の展開のなかに、啓蒙期の政治経済学の生誕を再定位するという動向とも、深くつながる視座である。¹

・ こうした研究の性格は、今日の思想史研究の主たる方法論となっているコンテキスト主義とも、少なからず共通する部分がある。コンテキスト主義はたんなる思想史版「実証主義」ではない。コンテキストは、発話行為としてのテキスト自体には含まれず、その前提をなす(とともに言説実践の蓄積のなかで再構成されていく)パラダイムである。論理実証主義とは対照的に、コンテキスト主義は言語論的転回以降の(ローティ的)分析哲学と、反哲学的で歴史主義的な性格を共有している。

・ ただし、ケンブリッジ学派は歴史学や政治思想史が中心であり、社会経済思想史の研究者は多くはない。その意味で『貿易の嫉妬』の著者、故イシュトファン・ホントは特異な巨星であった。こうした事情は、スコットランド啓蒙の研究が主として経済学部属する研究者によってなされてきた日本とは多分にことなっている。また本邦では、啓蒙期の大陸ヨーロッパの社会経済思想史についても分厚い研究が蓄積されてきた。こうした意味で本研究は、特にここ四半世紀で方法論上の大幅な刷新がみられた思想史研究の動向に対応しつつ、

¹ 研究動向のレビューとして、以下の拙稿を参照。「アダム・スミスと政治哲学の革命——「ユートピア的資本主義」論の現代的再構成」、『人文学報』第106号、京都大学人文科学研究所、2015年。「ポリシー・ポリス概念の歴史的展開——近世イギリス宮廷における「立法者の科学」の伝統からスコットランド啓蒙へ」、『青山総合文化政策学』第15号、2017年。

しかしケンブリッジ学派によっては(いくつかの例はあるもの²⁾あまり顧みられてこなかった啓蒙期フランスの政治経済学を、理論史的関心にくわえてそのコンテクスチュアルな側面にも着目して総合的に検討する、意義深い成果だといえよう。

・ さらに内容に立ち入っていえば、フィジオクラートとその対抗者たちによるフランス政治経済学の展開を、同時代の「社会」(経済社会・市民社会)の発展と、そこからの統治改革の要請という論点に注目しながら論じている点に、本書の大きな意義があると思われる。というのは、冒頭に述べたように、こうした視座はじつは、ハーバーマス以降のブルジョワ的公共性をキー概念とした啓蒙研究の問題構成に直結するものだからである。そこに伏在するストーリーはおおよそつぎのようなものである。すなわち、商業とプロト工業化により財を成した新興市民層(17世紀までの共和主義的市民 *citoyen* というよりは私的活動に専念する市民 *bourgeois* と観念された)が着実に社会的実力を蓄えながらも、政治的には無力なまま公式の意思決定プロセスから疎外されていたなかで、市民たちは(現代的な意味での)市民社会としての公共圏をみずからの富に裏づけるかたちで確立し、それがやがては政治的に機能する——ただし権力機構の一角をなす形で参入するわけでは必ずしもない——存在としての公論の醸成(*fermentation*)母体となっていた。

・ 本書の議論をこうしたプロットと照らし合わせたとき、主要なポイントが重なり合うだけにかえって、ハーバーマスらの議論の重大な問題点も浮き彫りとなってくる。はたして、ブルジョワ社会の啓蒙された公論は(統治に直接参画することはなしに)統治権力を市民の普遍的関心から批判し、統治者に公開性要求をつきつける主体としてもっぱら理解することはできるだろうか? 本書の諸論文(と執筆陣の単著や、森村敏己の奢侈論争および商人貴族論争研究)をふまえて示唆できるように思われるのは、以下の諸点である。

- ① 旧体制の統治改革の動きのなかで、それを大きく左右するファクターとして世論というものが胎動してくる過程に本書は注目している。既述のようにハーバーマスは、統治機構が占有する政治の領域を離れたところに、商業や産業活動に勤しむ自由な私人たちの集合体たる市民社会が形成されたと見た。けれども、森村敏己(『社会思想史研究』2015年度)が指摘するように、世論と統治(術)との関係を念頭におくなら、ブルジョワ的公共圏の核心にある世論を単純に「統治権力の専横を抑制する一種の制御装置」とらえるだけでなく、それが同時に「政策への支持を固めるという点で国家権力を補完」し、統治の正当性と効率を高めようというモーメントにも目をむける必要がある(合法的専制論はこの問題圏に位置づけることもできる)。フーコー流に言えば、国家権力に限定することなく「市民社会」の統治性をも注視すべきだということになるだろう。
- ② フィジオクラートの多くが社会改革の原動力として期待を寄せた啓蒙された世論は、実際にはフィジオクラートによる自由主義的改革ないし社会の合理化構想に必ずしも支持を表明したわけではない。(a) 独立心の強い伝統的な帯剣貴族を牽制するために新たに登用された法服貴族(官職保有者)が、けっきょく高等法院において王権による社会改革への抵抗基盤となっていたのは言うまでもないが、(b) 啓蒙知識人の多くも穀物論争の過程でフィジオクラートの合理的設計主義の思想を批判するようになる(「人類の党派」やアダム・スミスら)。
- ③ 穀物論争でもう一つ顕著なのは、「旧体制」の改革・合理化に抵抗した最大のモーメントとして、新興の第三身分(商工業に従事する市民)のみならずいわゆる「第四階級」(窮乏化する農民と前駆的都市プロレタリアート)が存在したことである。啓蒙された「公衆」はともあれ、伝統的なモラル・エコノミーを内在させた「群衆」は自由主義的改革に反対であった。また、彼らの識字率は低く世論を直接に構成できるものではなかっただろうが、識字階級の一部

² 代表的な著作としては、J. Shovlin, *Political Economy of Virtue* が挙げられるが、これは共和主義研究のパースペクティブにやや引きずられ過ぎているという感も否めない。

はそうした民衆意識を背景にカフェの三文文士などとして公論の急進化、ないし「思想協会」(オーギュスト・コシヤン)の形成に寄与したようにも思われる(さらに革命期には、サンキュロットから恐怖政治へ)。より穏健な第三身分に属する啓蒙思想家たちも、上述のように農民らの共有する適正価格(bon prix)や「必要の法」(民衆の安寧=公安 salut public)の伝統的な観念を啓蒙主義的に再定式化し、政治経済学批判を展開した。³

かくして、国家の政治領域から一定程度分離した「社会」の領域が、新興の識字階級を中心に公論を発信する公共圏として成長したのが啓蒙期の大きな特徴であったのは間違いないが、それが実際にどのように機能していたかとなると、ハーバーマスが描いていた図式にはとても収まりきるものではない。こうした視点からは、なぜフィジオクラートが一時期とはいえ王権の改革構想に決定的な政治的影響力をもちえたのか、また、このエコノミスト集団と統治や世論との関係はどのように考えられるのか、フィジオクラートに対抗する多方面の勢力もまた多かれ少なかれ公共圏(それは文芸的なそれには限定されるべきではないかもしれない)で世論形成に働きかけることで政治的意図をはたそうとしたとすれば、そこでの公論の力学はどのようなものとして描くべきなのか、といった問題が浮かびあがってくる。本書は、ポスト市民的公共性論の啓蒙研究のひとつの端緒としても読まれるべきであるように思われる。

- ・生産力主義(産業主義) vs 奢侈的消費の重視
- ・財政軍事国家論、懐疑的ウィッグ主義

本書の概要(第3章・4章・5章・6章・10章)

第3章 「国民的栄光の達成か、人類の繁栄の促進か——フィジオクラートの著作における戦争と経済」(安藤裕介)

- ・(私見では)フリードリヒ大王にもみられるようなアンチ・マキアヴェリズム、つまり栄光の極端な追求による国土の荒廃、ないし国富と公的安寧の破壊にたいする批判(ホントが『貿易の嫉妬』の序章で探究している論点!)の代表的な形態として、フィジオクラシーを位置づけることができるのではないかと? 公共(=諸国民と人類)の繁栄をつうじた国家的/国民的栄光の達成という革新的ロジック。

³ 科学アカデミーにおける *économie (politique)* をめぐる議論に注目する隠岐さや香論文 “*Économie and science in France during the age of social reform (1760-1790): agronomy, natural history and political arithmetic*” は、こうした視点からきわめて重要な成果である。理論的で観念的なフィジオクラシー——トクヴィルのいう「文芸の政治理論」——と較べ、科学アカデミーでの議論は(名前からするとやや意外なことに)はるかにプラグマティックで、農業生産過程の改良から穀物流通や価格設定、徴税方法に公衆衛生といったポリス(都市政策)への寄与を少なからず射程に収めた、実践的な統治技法(*art de gouverner*)の開拓でもあった。ハーバーマスの解釈図式が、既存の特権階級と新興の第三階級のあいだの緊張関係にもつばら焦点をあてがちなものに対して、科学アカデミーのエコノミー論の展開は、台頭する市民層や開明的な貴族層における知の啓蒙(*savoir*)が、その外部に位置する民衆の世界をどう捉え、そこにどのように働きかけて善き民衆統治(*pouvoir*)をはたそうとしたのかという問題を考えるうえで、けっして欠くことのできない最重要の研究対象である。フィジオクラートやスミスらが *économie politique* として国家財政・租税機構やその源泉である国富の最大化のための国民経済構造の分析に(ミクロ的基礎にも注意しつつではあるが)注力していたとすれば、ここでの *économie* の議論はより個別具体的で微視的な統治実践にかかわるものである。他方で注目すべきは、チュルゴの社会改革に挫折して以降のコンドルセの知的遍歴であり、革命期にいたる彼の *sciences morales et politiques* や社会数学の探究もこうした観点から再定位できるかもしれない。

- ・フィジオクラートの国民経済論や国内改革構想だけに注目していたのでは、この点はみえてこない。いわば彼らの国際関係論、間主権国家システムの水準に注目したことによって、はじめてこうした論点は浮上してくる。本論文の大きな成果といってよいだろう。
- ・フィジオクラートたちが戦争と経済の関係をどう捉えたか：
 - ① 初期ケネー。財政軍事国家の視点と反英雄主義。「人口」一辺倒ではなく経済規模などを勘案した「政治算術」の視点。外国貿易の重視。外国貿易の推進と軍事的観点から海軍を重視。
 - ② 7年戦争最終段階（ケネーとミラボー）。再生産を攪乱しない自衛戦争と攻撃的戦争の区別。
 - ③ 7年戦争終結後の4年間（ボードー）。自然的秩序の理解に基づく統治とは完全な自由貿易。
 - ④ その後の10年間（トロンヌ）。共通市場としてのヨーロッパ連合。アメリカ独立戦争。
- ・【問】 こうした転換を経たうえで、しかし他方なお「栄光」という視点が重視されたのはなぜなのか？ 太陽王ルイからボナパルティズムへの連続性。軍事的帝国（普遍君主政）からリベラルな経済的帝国へ？（アングロマニの）海洋帝国論への対抗という視点は？

第4章 「経済哲学——フィジオクラートの場合」（フィリップ・スタイナー）

Philosophie économique in the 'long' eighteenth century (1690-1830)

- ・フィジオクラシーを単なる純経済理論と考えるのではなく、学際的で総合的な「経済哲学」（社会と人間の総合的見方）としてとらえることで、その実像により的確にせまることができる。
- ・フィジオクラシーを経済哲学として理解することで、それに対する批判や対抗する潮流がどのような点で対立したのか、相容れなかったのかがより明確になる。
- ・重農主義経済哲学 = ①感覚論哲学にもとづく認識論・知識論、②自己利益を格率とする行為論・行為主体論、③政策論・立法論（徴税機構論と自由貿易論）。
 - ①感覚論哲学 ⇒ 自然法(則)の捉え方の変容。デカルト批判とデカルト主義的明証性。他方で「常識」も格率となる？
 - ②行為主体の格率＝（貨幣的）利潤(profit)の追求。功利主義的世界像。経済哲学の日常的行政・実践への翻訳。
（シヴィル・エンジニアとインフラ・プロジェクト：橋、道路、運河、鉄道 etc. ⇒Cf. 隠岐論文の主題） ケネー以後
 - ③スコットランド啓蒙とは対照的な、デカルト主義に由来する合理主義。

Quesnay's philosophical underpinnings

- ・利益と（穏和な）情念にもとづく主体の行為の集積が結果として最適な「自然的秩序」を構成する。
- ・統治政策も、個人の利益や情念を否定せずむしろそこに働きかけなければならない…？
⇒【問】 民衆のコモンセンスはむしろそうした行動格率に反する部分があったがゆえに、改革は失敗に終わったのではないか？ だとすれば、彼らの個人の行動原理を変容させるプロジェクトの是非が問題となるだろう。
Cf. ホント JT 所収の 'Adam Smith and the Political Economy of the "Unnatural and Retrograde" Order' の再検討が課題。
- △農業王国としてのフランスの自己意識。（67 ページ引用）
- △商人利益（特権的社団による特殊利益の追求）の批判（と商業の肯定——スミスらと同様の構図）。
- ・ル・メルシエ・ド・ラ・リヴィエールによる貪欲と競争の肯定。販売者と消費者を結びつける専制的な統治者としての貪欲。教皇的秩序とのアナロジー。（68 ページ引用）

Quesnay's theory of the legislator*(Taxation and the administration)*

△国王の富、国家の強さ、人民の幸福の並列。(69 ページ引用)

△真の富は農業部門から生じる純生産物。税は農業者の改良のための資本形成を阻害しないような方法で課税すべき。

- ・不生産労働として肥大化した不合理な徴税機構業務を批判。その分を農業部門の余剰価値の生産に充てるべき。この点でもスミスとの共通性。
- ・ただし、行政じたいの必要性を否定するわけではない。「経済的統治」は、地主階級が資本家・起業家的精神をもって土地財産を有効活用し、生産的階級の発展に資するように導くこと。(71 ページ引用)

△租税制度によって、農業生産者と土地所有者の適切な関係 (=市場における交渉・合意) を導くこと (ミラボー)。

⇒【問】果たしてこのシステムで地主階級も利害関心を啓蒙されて積極的に実際の地代を公開するだろうか? pp 73-74

- ・社会改革のイデオロギースキームとしての「公論」にたいする留保 (トローヌ)。租税制度改革では依拠できず。
 - 公論形成におけるパリの特権性。特殊な利益関心を有し、生産的階級の一般的利益と必ずしも一致せず。
 - 啓蒙に多大な時間を要する。⇒合法的専制のパリエーション

⇒【問】1779 年という時期を反映しているのでは? 改革の抵抗勢力は、従来の特権階級 (大貴族にくわえて法服貴族も) だけでなく、合理的な利害関心にもとづかない民衆の「偏見・無知蒙昧」にもあるということを確認に認識した結果ではないか? 専制権力は、第二身分・第三身分・そして群衆にも振るわれなければならない...

△ミラボー以来の地方行政の再編成構想 (多元主義への一定の目配り)。徴税請負の資本制的地主階級による代替。

(Money and the rate of interest)

- ・一般に生産主義的とみられる重農主義の流通論・商業論の重要性。生産と貨幣流通を適切に結びつける。国富 (純生産) 増大のための国内外の流通改革、そこでの貨幣論・利子論の意義。
- ・利子率を地代よりも低い水準にすることで、貨幣が金融・国債市場に向かわず、農業という生産的部門への投資に回るように導入する (反金融的貨幣論)。グルネー・サークル (商業の科学) と共通する関心事。

⇒【問】財政金融革命への批判的距離は、懐疑的ウィッグ主義とも重なるところがあるのではないか?
- ・貨幣の「交換手段」化の促進。「価値の保蔵手段」としての側面への警戒? Cf. ケインズの流動性選好論
- ・貨幣的利害階級・不労所得階級への政治的批判と連動。(生産労働・勤労を重視する価値観の台頭?)

第 5 章 「古典派政治経済学にたいするケネーの寄与」 (Gianni Vaggi)

- ・スミスとの共通性と差異。類似点 (剰余の概念、政治経済学の目標=国富増大) にも注目する必要性。
- ・重農主義は絶対君主政にたいする明確な立場をとっていないとヴォルテールやディドロに批判された (?)
- ・重農主義にもとづいた成長モデル。農業者による固定資本の蓄積。
- ・スミスは一国が富裕になるためのより一般的な条件を分析したとすれば、ケネーは、広大で肥沃な土地をもつフランスというより固有な対象に向けられた分析となっている。

⇒【問】果たしてそうか? 内需主導型の国民経済と輸出志向型モデルの区別。スミスのオランダ共和国の分析。

- ・スミスは技術革新が資本の蓄積に依存する点でケネーと見解を共有。しかし、分業理論にもとづく経

済成長理論という点はスミスに特徴的。

- ・資本蓄積における儉約・収入(revenue)の節約の重要性を強調した点でも、スミスはケネーと異なる。
 - Cf. 儉約の徳は、特権階級というより社会の一般の人びとによってより発揮されうる (common sense 論)。
- ・スミスにおける農業の強調を無視してはならない。そのうえでの排他的生産性のテーゼ批判。
- ・ケネーの価格理論。余剰(純生産物)の分配を特定する規則の必要。分配過程は価格体系を通じてなされる。
- ・穀物商人(中間流通業者)の介在の不生産性、価格の不安定化要因として批判。
- ・prix fondamental が、剰余価値の分配と資本の蓄積を統制する。
- ・価値論と分配論におけるケネーとスミスの長短。スラッフアの分析の重要性。

第6章 「チュルゴ——ケネーの後継者にしてスミスの先駆者」(黒木龍三)

- ・フランス政治経済学のひとつの核であるフィジオクラシーの発展的延長としてチュルゴの先端的経済理論を正当に位置づけることによって、じゅうらいの生産力主義的な啓蒙期経済学像を大幅に相対化する可能性を切り開いた論文。
- ・本稿があきらかにしているように、(疑似宇野派的)流通主義や貨幣的経済理論というラベルによってはとても片づけることのできない、驚くべき先駆的議論をチュルゴが展開していたとすれば、チュルゴにおける理論と実践の関係をどのように考えればよいのか、あらためて大きな問題が突きつけられるだろう。
 - すなわち、フランス啓蒙の理論的達成であるフィジオクラシーの反重商主義・産業主義を、フィロゾーフたちの期待を一身に背負って実践に移そうとしたチュルゴ改革、という理解が問い直される。チュルゴは限界革命以降の経済学を理論としては確立しつつ、政治家としては、実体主義的な重農主義経済理論にもつばらもとづいて改革の実践を進めたのか？あるいは、そもそもフィジオクラシーを客観的価値論にもとづく実体論的な経済学として理解するのが過度な単純化で、チュルゴはフィジオクラシーのある側面を全面的に展開したとみるべきなのか？
- ・生産と消費(交換)の両面からの一般均衡分析のアイデアは、すでにチュルゴによって確立されていたという主張とも考えられる。
 - スミスについては、A.スキナーが指摘したように、生産要素市場における自然価格の分析(長期均衡価格としての自然率の達成)において、個別の商品市場における価格による需給の均衡(部分均衡分析)にとどまらず、多財市場モデルにおける各市場間の一般均衡をもある程度解明していると理解することはできる(ただしこれには異論もある)。しかし、その労働価値説においてもつばら客観的価値論をとるために、予算制約と限界効用逓減の法則にもとづいた消費者の効用最大化行動による複数市場間の一般均衡という理解にいたることはない。他方、チュルゴは、利子率にもとづいた投資行動における利潤最大化という生産・供給の側からのアプローチと、主観的価値論(不等価交換モデル)と効用最大化行動という消費・需要の側からのアプローチの両面において、すでに一般均衡モデルを実質的に確立している…？

Natural order and free trade: the influence of Quesnay and Gournay

- ・ケネー：三階級論、二部門モデル、再生産・経済循環、交換手段としての貨幣、農業の排他的生産性
- ・グルネー：チャイルド『貿易論』の仏訳、自由放任(laissez-faire)。
 - Cf. ボワギルベール
 - チュルゴのハイエクの知識論(知識の実践性・状況依存性・偏在性にもとづく市場擁護)。(99ページ)
- ・チュルゴによる農業の排他的生産性テーゼの修正。資本競争による各部門の利潤率の均衡化メカニズム。

Economic progress in agriculture and entrepreneurs

- ・農業の発展段階モデルの提起。分益小作人と定額小作人・借地農の区別。
- ・資本主義的起業家精神の役割の強調（カンティヨンと共通性）。この点での地主に対する借地農の優位。（102 頁）

Capitalist and money

- ・余剰（剰余価値）を蓄積し、資本に転化するメカニズムの指摘。
- ・（価値尺度、交換手段にくわえ）価値の保蔵手段としての貨幣の役割の重視。ケネーとの差異。

⇒ 【問】 その含意はどのようなところにあるのか？

- ・貯蓄と投資を結びつける蝶番としての貨幣。貨幣の価値をしめすものとしての利子率。
- ・(a) 自己金融による投資行動と (b) 借入による投資。後者において資本市場・債券市場・金融市場が成立。
→ 利子率の低下は、利潤率の傾向的低下（定常状態への収束）をしめすものでは必ずしもなく、むしろ資本市場における供給側の構造変化（貯蓄行動の変容など）をしめすものと理解できる。経済発展と利子率。
- ・余剰の用途：①土地購入・賃貸、②設備・資材の購入、③賃金支払い、④貸付け（利子収入）
- ・ローのシステムの崩壊がチュルゴの議論にも影を落としている。

Comparison of the price system of Quesnay and Turgot

- ・すべての土地が地主階級によって占拠されたのちは、富裕になる方法は余剰の資本投下による利潤獲得。
- ・節約・貯蓄の徳の重視。ケネーとの差異、スミスとの共通性。
- ・諸部門の利潤率の関係についての考察。資本の利潤率 > 利子率 > 地代。
- ・土地収益は収穫逓減の法則を想定。製造業部門では収穫一定。⇒ 両部門での資本収益率の平準化。
- ・土地収益の逓減に相関して限界地価は低下。もっとも低劣な土地においては、農産物の総額は賃金と原材料と通常利潤のみを賄い、地代収入は発生しない。
- ・利潤率と工業製品の相対価格とは正の相関関係。他方、両者と地代は逆相関。
→ 資本主義的経営の結果、地主階級は没落する？
- ・チュルゴの価格体系は供給サイドで閉じるものではなく、需要サイドにも依存して決定される。

Conclusion

- ・土地が余剰（純生産物）を生みだす一方、そのすべてが地代として地主階級に分配されるのではなく、利潤率の水準、それゆえ農作物の相対価格水準に依存して決定される。
- ・市場価格と自然価格の長期的一致（スミス）と同様のアイデア。
- ・貨幣＝資本の概念。他部門間での資本競争の結果、利潤率は平準化するという機制の指摘。

第 9 章 社会改革の時代（1760-1790）のフランスにおけるエコノミーと科学——農学、自然史、政治算術（隠岐さや香）

- ・こんにち経済学の対象と考えられる「エコノミー」が、18 世紀フランスにおいて複数の領域を横断する学

際的な概念として変容・発展をとげていった過程を緻密に分析した論文。特に 18 世紀後半に、自然(哲)学・数学と社会科学(経済思想)とにまたがる領域で、この概念が議論のひとつの焦点になった点に着目。

- ・これまで“近代的”なエコノミー概念の起源を探究する試みでは、(1) 神学(自然神学を含む)におけるオイコノミア概念からの変容・展開の研究(アガンベン『王国と栄光』etc.)、(2) 啓蒙期のエコノミーが政治学的概念(公共経済・国家財政 etc.)であることに注目し、古典古代的な家政学の理解からの変容・展開を論じるもの(安藤裕介、渡辺恵一、野原慎司、上野 etc.)、(3) エコノミー・アニマルという生物学的・生理学的概念、あるいは靈魂論的・心理学的な概念との関係に着目するものという、大別して三つの方向性があったように思われる。本研究は、これら複数の動向に目配せしつつ、本格的な科学史研究に掉さしながら三つ目の潮流を大幅に推し進めたものと評価できる。これまで驚くべき量の史料を読みこんでフランス自然科学の歴史を研究してきた著者ならではの貢献といえよう。
- ・18 世紀後半のエコノミー概念をパリ王立科学アカデミーと『百科全書』の言説に照準しつつ分析する際、本論文はふたつの軸を設定：①生産(農業生産)の様式としての(rural) economy、②共同社会の運営・執行の様式としての(political) economy。
- ・特に近代化・都市化するパリで発生する新たな社会問題・都市問題にたいする自然学的知識をもちいた具体的対応が、ここでの焦点。公論の関心を集めた、都市開発(urbanism)や公衆衛生問題(cf. ポリス)。
- ・こうした問題に取り組んだ科学アカデミー会員は、同時代のほかの知識人と比べても自分たちの活動が政治色を帯びることに警戒的で、客観性・中立性・非政治性を強調し、政治化しかねないような問題に提言することには非常に慎重だった点を指摘(内部検閲としての査読制度)。商業政策にかかわる言及の禁欲など。
- ・この傾向は、チュルゴ改革とその挫折から革命前夜にいたるコンドルセの経歴のなかで微妙に変化。ダランベール派として登場した彼は、しかし政治算術の伝統のなかで数学知の社会工学的な応用可能性にも注目(社会数学、国家学としての統計学 etc.)。
- ・

The traditional classification of morals and two understandings of 'economy' in the *Encyclopédie*

⇒【問】 伝統的な道德哲学の三分類の解体という点を極端に描きすぎてはいないか？

'Mode of (agricultural) production' and Linnaeus' 'economy' as scientific context

- ・リンネの影響：狩猟や農耕の実践的技術の改良にとどまらず、化学・植物学・農学といった科学的知見を食糧生産(家政)に応用しようという試み。

⇒【問】 ベーコン主義(知 savoir は力 pouvoir なり)やニュートン主義的方法の一バリエーションといえる？

- ・エコノミーは対外政策や商業にまで拡張され貿易会社の例も挙がるが、ただし生産への関心が基本。
- ・スタイネルやアルノー・オランの研究。グルネー・サークルにおける「商業の科学」を含むエコノミー概念の発展(*Journal économique*; André Morellet, *Catalogue d'une bibliothèque d'économie politique*)。他方で、『百科全書』ではエコノミーと商業の関連性は希薄(フォルボネ執筆「商業」等)。フランスではエコノミーの語は、商業よりも(農学、自然史、工芸技術 mechanical arts を含んだ)リンネ的な概念と結びつくようになった。それは、前者が当時の政治的な環境のなかで論争を招きかねない主題だったから。

⇒【問】 政治的要因もあるだろうが、認識的要因もあるのでは？ つまり、概念の分類において家政術と貨殖術・取財術を峻別するのはアリストテレス以来の伝統。

Economy as ‘mode of administration’ in the *Encyclopédie* and its ambiguous relationship with political arithmetic

・ルソー、ディドロ＝ブーランジェの『百科全書』項目。

“(political economy is) an art and a science for maintaining humans in society and making them happy; as such, it is the most useful, the most interesting and sublime one [subject] available to humankind” [11:366-7].

・執行の様式としてのエコノミーのほうは法学・政治学と結びついたままで、自然科学・数学との関係は希薄なまま。他方、「政治算術」(ディドロ)の項目では数学的知との結合がみられる。

⇒【問】これは「人民の統治術」への統計学の応用であって「商業」への応用ではないという評価は妥当か？
当時の言説に則せば、商業政策とはむしろポリス統治術の最大の領域だったと見るべきではないか？

・1780年代のコンドルセの蓋然性論の道徳政治科学への応用。1760年代のボードーの試み (cf. 安藤の研究)。

‘Oeconomie’ for the Royal Academy of Science in Paris and its characteristics**(The Academy and the practices of internal censorship)**

・内部検閲、政治化しにくい“科学的”なトピックへの研究の限定。その事例。“political” economy で顕著。

(The adoption of an open policy for ‘economy’ towards the 1780s)

・ブルトゥイルのアカデミー部門改革。「より直接的に有用な科学」へのコミットメント。

・カロンヌの行政改革が背景。農業行政委員会、都市整備や河川事業を含む公共事業政策。公共善と公論。

・「公共的・政治的エコノミー」問題としての病院改革の事例。オテル・デュエ火災。フーコーの研究。

・ラヴォワジエらとともに農業委員会に諮問したデュボン・ド・ヌムールのアカデミー観。

“Morals, politics, and even administration are also sciences [...], some of which are already, and, hopefully, most will one day become likely to be rigorously solved by calculations, and the others a sufficient degree of approximation as to enlighten the intention of a paternal government in practice”.

・道徳政治科学をふくむ科学的手法を通じた行政決定プロセスの合理化の重要性を主張した作業部会の報告。

(The ‘Economie’ of the Academy and its limits)

・病院改革問題にくわえ、シャトレ刑務所の診療所と大規模収容施設の空気循環の問題もエコノミーの分類。

・屠畜場のパリ中心部からの移転問題も。さらにローンの支払いや富くじ問題への確率計算の応用、生命保険やトンチン年金をテーマとした論文も提出される。他方、政治性の高いと判断されるテーマは受理せず。

Conclusion

・“Political economy is a science that focuses on knowledge concerning the origin of territorial and industrial wealth, the usage of such wealth, population, commerce, the foundations thereof, distribution, and the laws and systems concerning these matters” (Peuchet)

・18世紀フランスの「エコノミー」の自然科学・数学的知との近さと、商業からの隔たり。革命期の転換。

第 10 章 「ピエール・プレヴォの政治経済学と同時代の知的ネットワーク」(喜多見洋)

・本邦での社会経済思想史の重厚な研究蓄積をもとにしつつ、近年の欧米での啓蒙研究の潮流でもある知識の一般的流通や、それを支える人的ネットワークと物質的基盤ないし広義のインフラにも注目した開拓的な業

績と評価できる。

- ・大文字の思想家とは必ずしも言えないP.プレヴォに注目することで、はじめて見えてくる当時の知的ネットワーク。また、ジュネーヴ共和国がフランス語圏・英語圏の啓蒙にはたした役割。

Cf. 啓蒙の世紀における都市共和主義。オランダ共和国の位置づけ。ヴェントゥーリが依然として有する重要性。⁴

- ・ローゼンブラットや河合清隆のルソー研究にも連なる成果。

⇒【問】「ルソー焚書事件とプロテスタント銀行家」論文との繋がりがあればご教示願いたい。

Prévost and eighteenth-century Geneva / Prévost's life and works

- ・1781-82年のジュネーヴ革命。パリへの共和主義思想の輸出源、金融ネットワーク（ネッケル etc.）。

⇒【問】革命後亡命者の国際的ネットワークは、急進民主派とルソー周辺のサークルとでどのような関係にあったのか？

- ・翻訳(*Bibliothèque britannique*)と、書簡や旅行などの人的交流を通じた「ブリテン啓蒙」の大陸への受容。

Prévost's economic thought

- ・プレヴォの経済思想の変遷。スミス『哲学論集』の翻訳（1797年）。商業規制批判と経済的自由の尊重。

the science of the government of a political body that desired 'to correct abuses and to increase the monarch's revenue in relieving the people by fair distribution and by useful reforms' (p. 183)

⇒【問】スミスらブリテン思想の影響による、統治論（財政・租税政策論）から客観的分析としての自由主義経済学（富の科学）への脱皮と考えるより、統治の科学／技法の内在的な展開として考えるべきではないか？特にウィンチ『アダム・スミスの政治学』やホーコンセン『立法者の科学』以降のスミス研究をふまえるならば。

- ・他方で、近代領域国家とは対照的にじゅうぶんな規模の国民経済を有しない小国（都市共和国）における経済発展モデルの模索。⇒（「富」と同時に）「人口」への注目。
- ・マルサス『人口論』の翻訳（BBへの抄訳1805-6年、フランス語訳1809年、全訳1823年）。
- ・D.スチュアート『人間精神の哲学』（と、H.ブレア『修辞学・文学講義』）の翻訳も。
- ・国富分析と人口論との接合をみずからの課題とする。⇒その帰結は？ Cf. D.スチュアートとの共通性
- ・アシニャ批判・公債(public debt)批判の観点からのフランス併合批判。
- ・都市ジュネーヴの国際性。スチュアート、マルサス、リカード、セー、シスモンディらとの交遊・文通。

Prévost's political economy and social reform

- ・フィジオクラートの社会改革との差異。産業構造や国民経済の規模の違いを考慮？
- ・スミス経済学の修正（既出）。

Prévost's political economy and intellectual network

- ・ユグノー、ジュネーヴ・ネットワーク、プロテスタント銀行家ネットワーク、親英派ネットワーク。
- ・サミュエル・ロミリーと急進派・ベンサム主義者の社会改革構想。 Cf. 青年期におけるルソーの影響
- ・経済教育への関心。晩期啓蒙あるいは啓蒙の終焉と19世紀への架け橋。

⁴ 『啓蒙のユートピアと改革』。Cf. 「近世的都市共和主義」という市民的で自治的な政治文化に注目しつつ「アーバン・ベルト地帯」に展開したもうひとつの近世ヨーロッパを描きだしたのが、ハインツ・シリングである。Heinz Schilling, "Stadt und frühmoderner Territorialstaat. Stadrepublikanismus versus Fürstensouveränität.," in L. Schorn-Schutte und O. Mörke Hursg., *Ausgewählte Abhandlungen zur europäischen Reformations und Konfessionsgeschichte von Heinz Schilling*, Berlin, 2002.